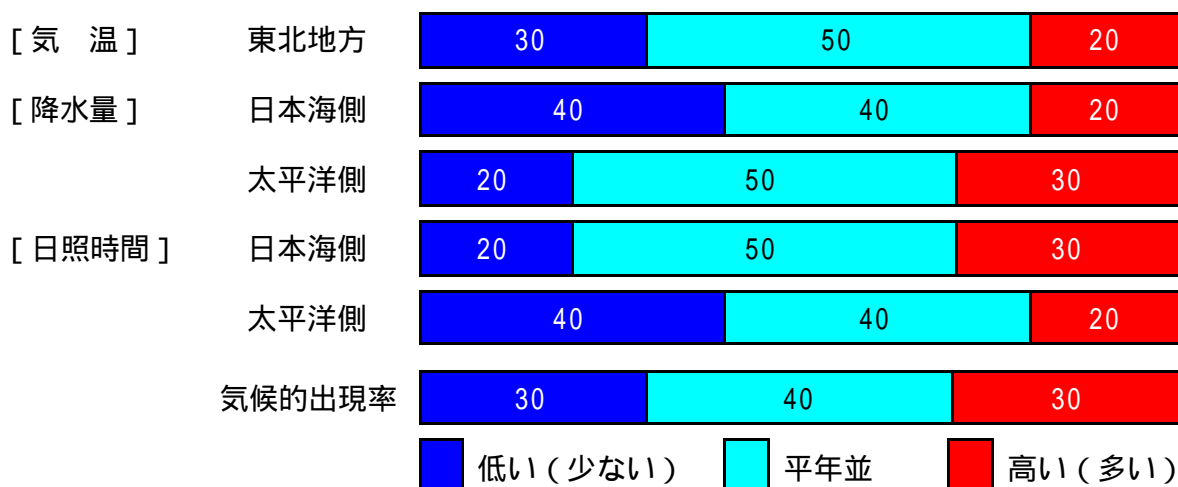


東北地方 1 か月予報の解説（予報期間：7 月 3 日～8 月 2 日）

平成 11 年 7 月 2 日 仙台管区气象台

1. 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）



[気 温]: 東北地方は「平年並」の可能性が大きく、その確率は 50％です。次に大きい確率は「低い」で 30％です。「高い」確率は 20％と小さい。

[降 水 量]: 日本海側は「少ない」か「平年並」の可能性が大きく、その確率はそれぞれ 40％で、「多い」確率は 20％と小さい。

太平洋側は「平年並」の可能性が大きく、その確率は 50％です。次に大きい確率は「多い」で 30％です。「少ない」確率は 20％と小さい。

[日照時間]: 日本海側は「平年並」の可能性が大きく、その確率は 50％です。次に大きい確率は「多い」で 30％です。「少ない」確率は 20％と小さい。

太平洋側は「少ない」か「平年並」の可能性が大きく、その確率はそれぞれ 40％で、「多い」確率は 20％と小さい。

2. 予想される天候の特徴（もっとも高い確率の予報が実現した場合の天候は以下の通りです。）

向こう 1 か月

期間の前半は梅雨前線やオホーツク海高気圧の影響をうけやすく、太平洋側を中心に平年同様曇りや雨の日が多いでしょう。後半は平年同様晴れの日が多くなる見込みです。

平均気温は「平年並」でしょう。（平年の晴れ日数は約 13 日です。）

各予報期間の天候の特徴

1 週目…………… 3～4 日頃にかけて梅雨前線の影響で全般に雨となるでしょう。その後は、
(7 月 3 日～7 月 9 日) 梅雨前線やオホーツク海高気圧の影響で太平洋側南部を中心に曇りや雨の日が多い見込みです。日本海側北部では晴れる日があるでしょう。
平均気温は低い見込みです。

（平年の晴れ日数は約 3 日です。詳細は週間天気予報を参照して下さい。）

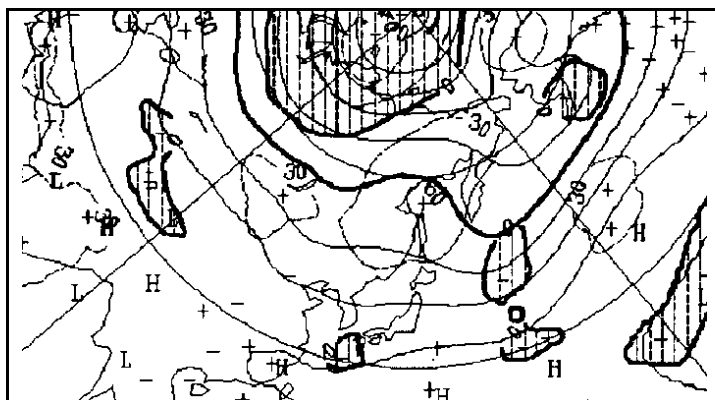
2 週目…………… 梅雨前線やオホーツク海高気圧の影響をうけやすく、太平洋側を中心に平
(7 月 10 日～7 月 16 日) 年同様曇りや雨の日が多いでしょう。

平均気温は平年並の見込みです。（平年の晴れ日数は約 3 日です。）

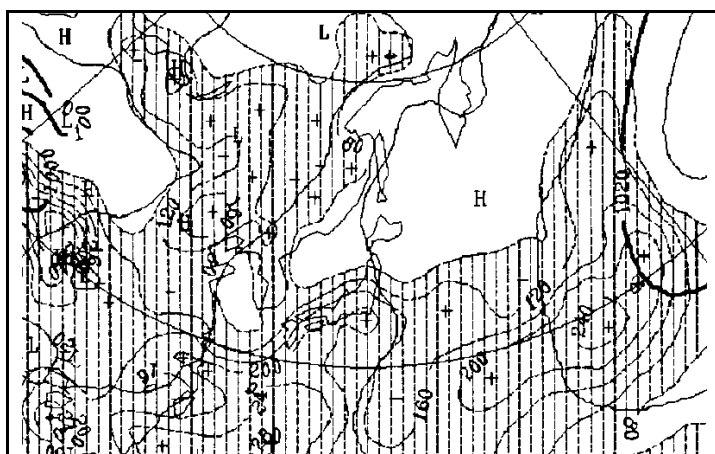
3～4 週目…………… 梅雨前線や低気圧の影響で曇りや雨の日もありますが、平年同様晴れの日
(7 月 17 日～7 月 30 日) が多くなるでしょう。

平均気温は平年並の見込みです。（平年の晴れ日数は約 7 日です。）

予想される天候に関する循環場の特徴（アンサンブル平均天気図）



月平均の 500hPa 高度・偏差
(等高線: 60m 毎、偏差: 30m 毎、陰影部: 負偏差)



月平均の地上気圧と降水量
(等圧線: 4hPa 毎、降水量: 40mm 毎、陰影部: 80mm 以上)

・ 500hPa 高度・偏差

月平均では、日本付近は広く正偏差に覆われている。また、5880m 線が日本の南海上に位置する。一方、オホーツク海には優勢なリッジがあり、日本付近は逆位相パターン。

2 週目（各週の図略）は、1 週目と同様にオホーツク海に優勢なリッジがあり、日本付近は逆位相パターンが続く。しかし、3～4 週目にはオホーツク海付近のリッジは見られず、5880m 線が東日本まで北上する。

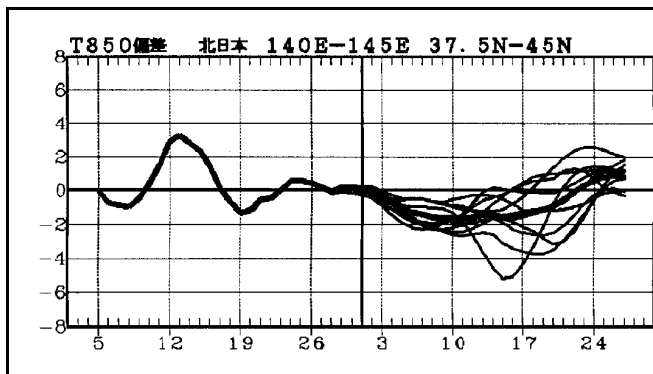
・ 地上気圧と降水量

月平均では、梅雨前線に対応して日本の南岸にまとまった降水域がかかる。また、太平洋高気圧が日本の南に張り出すが弱く、オホーツク海高気圧が明瞭。

2 週目以降の地上の降水量（図略）は、日本付近に広がるが、まとまったものは見られない。また、2 週目までオホーツク海高気圧が顕著だが、3～4 週目にははっきりしない。

3．北日本 850hPa の気温偏差の実況と各アンサンブルメンバーの予想

北日本 850hPa の気温は、アンサンブルメンバーの平均でみると 3 週目にかけて平年を下回るが、その後は昇温して平年を上回る。2 週目以降はアンサンブルメンバーのバラツキが大きい、昇温傾向は同様。



北日本 850hPa 高度（上空約 1500m）での気温偏差の実況と予想

縦軸：気温偏差（℃）横軸：日付

発表日以降の細線は各アンサンブルメンバーの予想値、太線は平均値。

注）資料の内容を他の要素により修正して予報を組み立てることがあります。

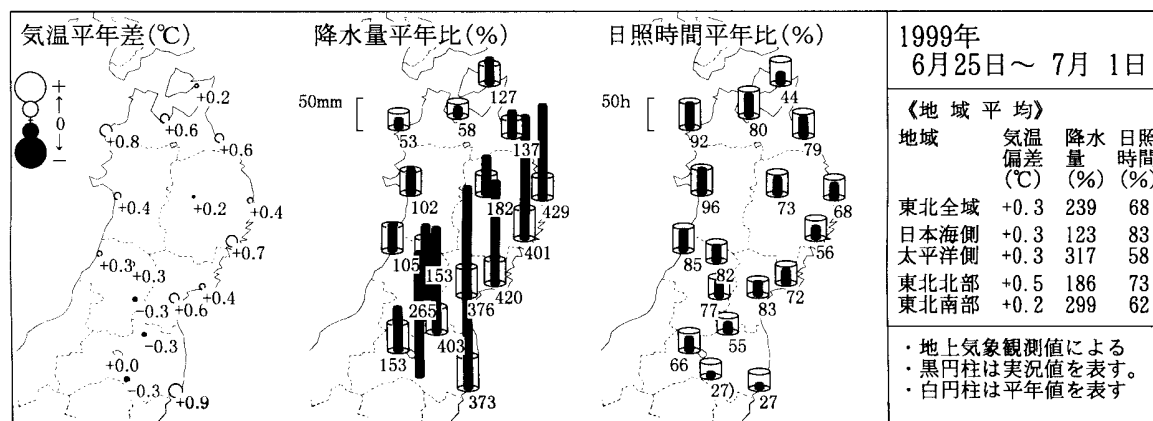
・ 850 hPa の気温は、地上の気温と必ずしも対応しないことがあります。

注：1 か月予報では、よく似た初期値から出発した 10 個の数値予報結果のバラツキ具合から予報の信頼度や確率を計算します（この手法をアンサンブル予報といい、10 個の予報結果のそれぞれをアンサンブルメンバーといいます）。一般に予報結果がばらつかないほど、大気の流れが予測しやすい状態にあると考えられます。このような状態の時は、信頼度が高くなり、確率の大きな予報を出すことができます。

4．最近 1 週間（6 月 25 日～7 月 1 日）の天候の経過

この期間、日本の南岸に停滞した梅雨前線や低気圧の影響を受け、曇りや雨の日が多かった。特に、30 日は梅雨前線の活動が活発化したため、太平洋側を中心に大雨となり、各地で土砂崩れや家屋への浸水等被害が発生した。30 日の各地の雨量は、白河で 119.5mm、福島で 116.0mm、大船渡で 108.0mm、仙台で 107.0mm に達した。

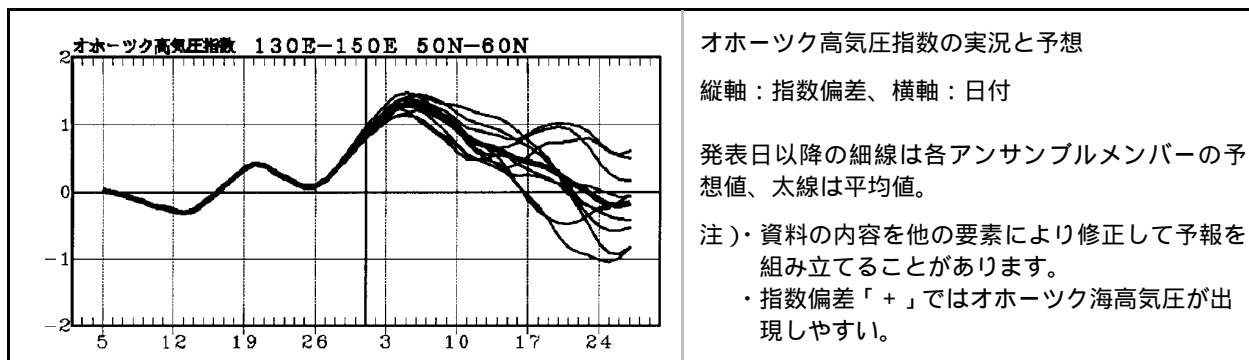
気温は平年を上回る。降水量は平年を上回り、特に太平洋側で多い。日照時間は平年を下回り、特に太平洋側で少ない。



最近 1 週間の平均気温、降水量及び日照時間の平年差（比）

5．その他

オホーツク高気圧指数は、アンサンブルメンバーの平均でみると 1 週目に高極になった後、3～4 週目にかけ下降し平年並になる。週間天気予報の資料でも、1 週目はオホーツク海高気圧の影響を受けやすい。しかし、2 週目後半からは再び高指数を予想するものと低指数を予想するもの等バラツキが大きくなり、信頼度は小さい。



梅雨は春から夏に移行する過程で、その前後の時期と比べて雨が多くなり、日照が少なくなる季節現象です。季節の変化は、ある日を境に明瞭にその季節に入り又は終わることはなく、双方の季節が交互に現れる遷移期間を経て変化しています。このため、梅雨の入り・明けの時期を遷移期間（平均的に 5 日間程度）の概ね中日をもって「日頃」と表現しています。

この時期、日本付近は梅雨前線や低気圧の影響を受けやすく、年による違いはありますが、特に梅雨末期には南から暖かく湿った空気が流れ込んで梅雨前線の活動が活発となり、大雨となりやすいことから、土砂災害等防災上の注意が必要な季節です。

梅雨入り・明けの時期

	今年の梅雨入り	平年の梅雨入り	昨年の梅雨入り	平年の梅雨明け	昨年の梅雨明け
東北南部	6 月 7 日頃	6 月 12 日頃	6 月 3 日頃	7 月 23 日頃	特定しない
東北北部	6 月 7 日頃	6 月 14 日頃	6 月 3 日頃	7 月 26 日頃	特定しない

